

Partner 医療連携

病気を診る整形外科から「生活を見る」医療機関へ

栃木県宇都宮市の村井クリニックでは、訪問診療をきっかけに「地域連携推進室」を開設し、医療や介護の連携を進めながら、自治会、福祉や行政機関とともに「地域を支える医療のしくみづくり」を目指しています。

整形外科単科から診療科目を増やし「地域包括ケア研究会」も主催

当院は先代が1978年に開院した整形外科医院で、地域の皆さんに質の高い専門医療を提供してまいりました。私自身は東京で訪問診療を経験した後、2006年に当院のペインクリニックで勤務し始めました。その後、2010年には在宅療養支援診療所を開設し、内科、リハビリ、もの忘れ外来と、患者さんのニーズに応えながら診療科目を増やし、地域の方々の生活に寄り添った総合的な医療の提供を目指しています。

地域包括ケアの必要性が増す中で、2015年には医療・介護の総合相談窓口となる「地域連携推進室」を開設しました。ケアマネジャー、訪問看護師など介護従事者の皆さんとも密に連携して、病診連携・診診連携、医療・介護連携のほか、地域医療・地域貢献事業に力を入れています。さらには、「地域包括ケア研究会」も主催し、自治会、福祉や行政機関とともに「地域包括ケアシステム」の構築を考える活動も行っています。

病気を診て病気を治すのではなく生活を見て生活を改善する

地域に必要とされる医療機関には何が求められているかを考えたとき、医療の提供だけにとどまらず、患者さんの生活を支える必要性を感じました。

整形外科は高齢者の患者さんの割合が高い診療科です。背骨の圧迫骨折では、治療後約1カ月の「安静指導」を必要とする間に、患者さんは歩けなくなることもあります。「病気を診て病気を治す」ことはできても、患者さんのQOLが低下したのでは、医療が住民の生活に貢献できていないといえません。患者さんの生活の質を考えた痛みのコントロールや、ADLを維持することを目指すべきであり、そのために「生活を見て生活を改善させる」ことが肝心なのだ



村井クリニック 院長 村井 邦彦

と思ったのです。それが必要と思うと、おのずと医療・介護連携を行う必然性が見えてきました。

しかし、「生活を見る」ということは外来診療だけでは容易ではありません。われわれには「できること」と「できないこと」があり、当院ですべてを行うことはできません。そのため他の職種の方々の協力が必要なのです。

一人の患者さんを取り巻く医療・介護・福祉の多職種の方々と連携し、自立した生活を支えるために、医療資源や地域の社会資源をどのように使えば良いか、という視点を持つようになりました。

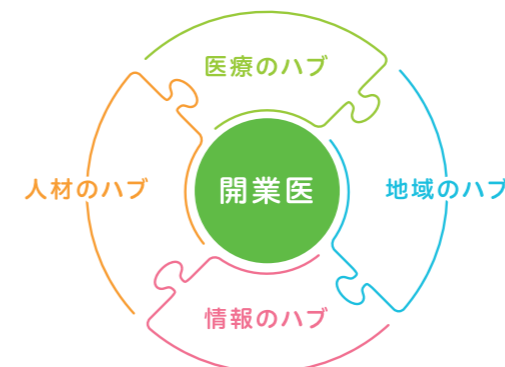


疾患の早期発見・早期介入は病院経営にもメリットがある

医療や介護、地域連携における患者さんのメリットは大きいと思います。高齢者の中には自分の状況や症状を言葉で伝えることが難しい方もいます。「生活を見て」病状や生活状況を把握しておくことは、安心感を生みます。「車の運転は心配」という方に、医師の立場からご家族やご本人への説明や生活改善の提案もできます。様子の変化から、認知症や骨粗鬆症の早期発見・早期介入も可能です。早い段階での気づきや受診勧奨は地域の中にあるのです。

また、高齢者は加齢とともに複数疾患を合併する比率も高く、多剤併用も多くあります。ポリファーマシーの問題にも連携が助けとなります。

開業医は「医療のハブ」「地域のハブ」「人材のハブ」「情報のハブ」の拠点となるべきであり、患者さんを診るのに必要なつながりをつないでいくと自然と、「ハブ」になっています。それが「連携」だと思います。



しかし、職員にとっては従来の業務に新たな仕事が増えるため負担が増えることもあり、当初は当院でも良い反応はありませんでした。とはいえ、そこは組織の長として、「外来も訪問診療も予防医療も、そして地域貢献活動も行う。これが医療機関の仕事である」と方針を打ち出しました。

幸いにも職員のモチベーションは向上し、地域の病院や介護施設が開催する研修会にも積極的に参加するようになりました。また、当院の取り組みやメッセージに共感して求職者も増えており、地方都市の課題でもある人材不足の解消にもつながっています。

医療・介護制度の変化を幸せになるための医療につなげる

今後は、福祉や行政、自治会も含めた広い意味での地域づくりを目指したいと考えています。医療の未来は、技術の進歩も大事ですが、住民が医療に依存しないマインドを育てることも重要です。住民の方も医療制度や介護制度を理解して、上手に使い予防意識を高めていただくことを「地域ケア研究会」などの場で対話しています。医療費削減のために健康維持の努力をするのではなく、住民の皆さんが主体的に「自分たちの地域が良くなり、幸せになるために」という意識を持つことがこれからの地域医療にとって必要だと思うのです。

転倒、骨折、ロコモティブシンドロームなどの整形外科疾患は、要介護状態の入り口ともいえます。予防のためには日々の運動が必要ですが、やる気のない方はどうしてもできません。なぜやる気がなくなるか、それは、社会的な役割や関わりを失っていく「社会性の喪失」が前提としてあります。こうした根本要因は外来診療で診ることはできませんが、生活を見ていく中で、その方の人生の喜びとは何なのか糸口がつかめれば、よりふさわしいサポートが見つかるかもしれません。

中国のことわざ「小医は病を医(いや)す 中医は人を医(いや)す 大医は国を医(いや)す」が表すところを目指し、地域を支える医療を意識し続けることで、人々を幸せにするための医療に向かっていきたいと思っています。



村井クリニック
栃木県宇都宮市宝木町
1丁目-2589
<http://www.murai-opc.org/>